

## 自然地域名「北上盆地」と「北上平野」

—地理教育における自然地理用語と自然地域名の問題 (1)—

米地文夫\*

(1991年6月28日受理)

### 1. はじめに

地理教育には、いくつかの大きな問題があるが、小論でとりあげるのは、ともすれば暗記に偏りがちな地名の教育の問題と、理科との境界が曖昧で、断片的な知識の詰め込みになりがちな自然地理教育の問題との、組み合わせである自然地域名の問題である。

時折、第二次大戦前の地理教育を受けた人々から「北上平野と私たちは学校で習ったのだが、若い人にそれは間違いで、北上盆地というのが正しいといわれるのですが…」と当惑したようにいわれたり、「北上平野とってはいけないのか」と質問されたりする。

筆者自身は国民学校高学年の頃、担任教師に「平野は海岸に多いが、北上平野のように大きなものは、海に面していなくても平野と呼ぶ」という説明を聞いて納得し、かつその北上平野の一角に住むものとして何か誇らしいような気がしたことを記憶している。

一方、この事について試みに岩手・宮城両県の計16人の中学校や高校の社会科教師に聞いてみたが、ほとんど異口同音に「北上盆地が正しく、平野は誤り」と答えてくれた(例外は2名で、平野が適切、どちらでもよい、各1名)。だが果たしてそのように断定的に答えられる問題であろうか。

この小論は、例としてこの「北上盆地」と「北上平野」をとりあげ、この問題を考える視点の多角的な検討を試みたものである。すなわち地名の教育の問題と自然地理教育の問題との重合した「地理教育用語としての自然地域名称」のもつ問題点を具体例を通じて考察しようとしたもので、地理教育、自然地理、地名学の各分野の方々のご批判を仰ぎたいと考えている。

### 2. 現在の地理教育用語としての「盆地」と「平野」

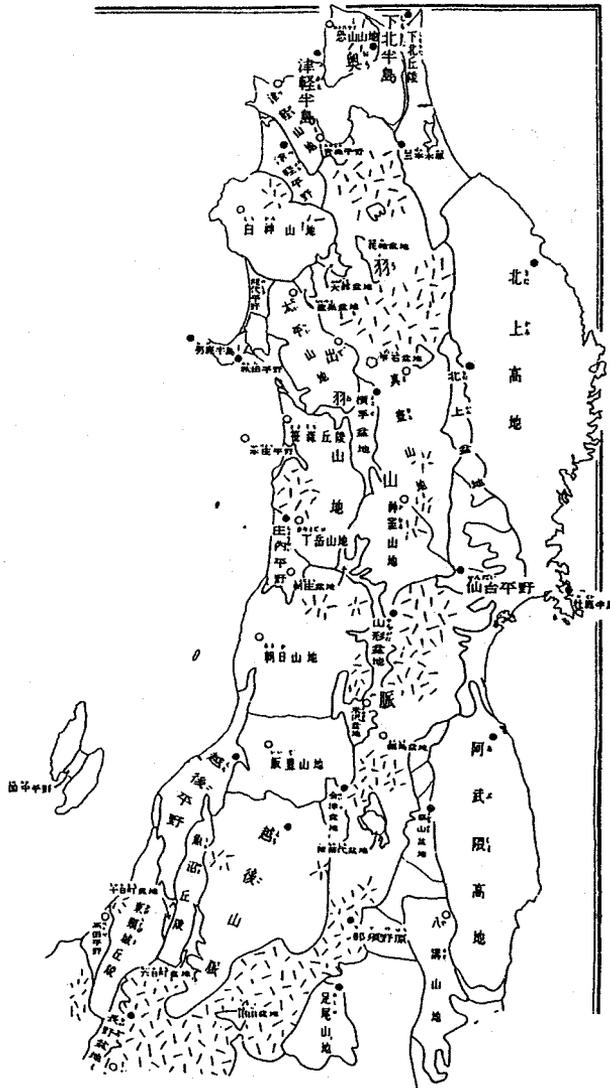
現在、地理教育用語として用いられる「盆地」や「平野」の定義は、1958年に文部省が発表し、翌年刊行(文部省1959)の「地名の呼び方と書き方《社会科手びき書》」に示されて以来、解説書(松尾1959)や大蔵省印刷局刊行の「当用漢字・現代かなづかい・送りがなのつけ方」(白石1960)

---

\* 岩手大学教育学部

の中への転載などにより、定着が図られた。もちろん教科書や地図帳をはじめ、現在では一般書に至るまで、この用語が普及している。

この文部省用語は、それに先立って建設省地理調査所（現国土地理院）が1954年に専門の研究者や関係官庁等の意見を徴して定めた「主要自然地域名称図」（第1図）にほぼ依拠しており、この図については学会誌にも山口（1955）により紹介されている。



第1図 主要自然地域名称図（地理調査所1954）

黒丸は縮尺200万分の一程度の図に用い

白丸は縮尺100万分の一～50万分の一の図の場合、

黒丸と共に用いる地名。

短線模様は火山地域。

これらにおける「平野と「盆地」の定義と例示<sup>2)</sup>は次のようになっている。

平野……海に臨む平地に対して用いるものとする。

〔例〕 関東平野、仙台平野

盆地……周囲を山地によって囲まれた平地に対して用いるものとする。

〔例〕 北上盆地、甲府盆地、伊那盆地

また、これらの自然地域を示す固有的な部分の呼び方の基準も、次のように示された。

- (1) 長年にわたり、全国的な規模において習慣的に使用され、それが通念となっているものについては、その名称に従う。

〔例〕 関東平野

- (2) 山地にあつては、その主峰の名をとる。

〔例〕 八溝山地、金剛山地

- (3) 平地にあつては、その中心都市の名をとる。

〔例〕 大阪平野、山形盆地

- (4) 以上の基準による名称が適切であると認めがたい場合にかぎり、国名・郡名、またはそれらの複合名、その他の地域名をもって示すものとする。

〔例〕 吉備高原、津軽平野、美濃三河高原、九十九里浜平野

第二次大戦後、当用漢字や現代かなづかいなどにより、いわば正書法というべきものが大きく変わった時点で、地名についても統一した基準を設けたいという意図そのものは、おおむね妥当なものといえる。しかしこれまでの慣用の程度をどう評価するか、それぞれの自然地域をどう定義するか、などについては必ずしも十分な検討がなされたとは筆者には思えない。むしろ関係部内における差し当たりの一応の目安というべきものを作った、というようなものが、唯一正しい定義・正しい名称として地理教育の中に取り込まれ、現場の教師がこれに固執するという事態を生んだことは、多くの矛盾や誤解を生ぜしめる結果を招いているといえよう。

その結果、①佐久平、諏訪平、伊那谷などの歴史的呼称が消え、②自然地域用語の変更が混乱を招き、③海外の地名との整合性がなくなり、④国際的には通用しにくい訳語が日本の自然地域につけられる、などの問題が生じている。これらについて簡単に説明してみよう。

①山国信州の人々の知恵の生み出した「平」と「谷」の区分は、まとまった平地をもつ北信・中信と、狭く長い谷底平野の続く南信との地形の違いを端的に表現している。このような呼称を用い難くする<sup>3)</sup>ことは、地域文化の軽視といえよう。

②この文部省による自然地域名称の設定時には、もちろん混乱が大きかったが、その後一部の手直しが行われ（例えば北上山地→北上高地）、再び現場教師の間に当惑と混乱が生じた。

③地理教育において用いられている教科書や地図帳には、アマゾン盆地、コンゴ盆地、パリ盆地、大鑽井盆地などが載っているが、これらはいずれも日本の地理教育で用いられている盆地の定義には、当てはめ難いものである。逆にカリフォルニアのセントラルバレー Central Valley は、日本の定義では盆地になるため、カッコして(カリフォルニア盆地)と付記(米国で California Basin と呼ばれることはほとんど無いにもかかわらず)したりするなど、日本地理と世界地理との盆地の定義の違いが、海外の地形の理解を妨げている。

④例えば今用いられている北上盆地を、Kitakami Basin と訳すのは実態を表現しにくい。むしろ Kitakami Valley あるいは Kitakami Valley Plain の方が適切で、流域としての意味を加えるために Basin を用いるならば、Kitakami River Basin とするのが妥当であろう。(ただし、この

場合は北上川の下流の流域も含むことになる。)

このような日本の自然地域としての「平野」「盆地」の定義に疑問を持った研究者はごく稀で、わずかに筆者(米地1977, 1980, 1984, Yonechi1985, 米地1989)と梶村(1986)のみのものである。むしろ大勢は、有井(1985)が述べているような、高原、高地、台地、平野などの用語には問題があるが「わが国の盆地については、用法上問題が無い」とする考えであるらしい。

筆者は、日本の地理教育などにおいて用いられる「盆地」という語は(もともとの basin の訳語というよりは) valley にあたる(米地1977)かまたは depression に相当し(米地1984)、現在の日本における盆地の定義は世界の他の地域の basin などには通用しない(米地1980)が、そのような定義の根底には日本人独特の景観の認識の仕方があり、それが低地を「盆地」と「平野」とに二分することになったことが指摘され(Yonechi1985)、具体的には本来の意味の盆地の底の平らな部分のみが日本では「盆地」とされる(米地1989)ことなどを明らかにした。

梶村(1986)もこの日本的定義を「盆地の概念を従来のものよりも拡大して考えた結果、平野の概念が局限されて考えざるを得なくなった矛盾を生じている」と批判している。

筆者の批判と梶村のそれは必ずしも同じ内容ではないが、いずれにせよ大きく変えた定義の内容に疑義を持った点で共通している。では、この定義の転換以前の地理教育において、この二つの用語がいかなる扱われ方を受けてきたかをみて、現行のものと比較してみよう。

### 3. 地理教育用語としての「盆地」と「平野」の変遷

明治3年(1870)の内田正雄編「輿地誌略」(大学南校刊)は、外国の地理書を翻訳編集したものであるが、その中には「谿谷ハ両山ノ間及ヒ山脈ノ中間ニ在ル土地ヲ云フ」「低地ハ海面ヨリ纒ニ高キヲ云フ」とある。また、明治7(1874)年改正の「地理初歩」(文部省刊)には、「両山ノ間ヲ、谷ト云フ」「地ノ広平ナル者ヲ、原ト云フ」とあり、明治初期の地理教育の場では、従来一般に使われていた用語も、そのまま用いていたことが分かる。

やがて平野の語が用いられるようになり、古くは例えば明治10年(1877)大槻修二編「日本地誌要略」の巻之二には、(関東の)「中央ハ、廣野・五十里ニ互リテ、平坦ナルコト、全国中・又其比ナク、謂ユル八州ノ平野ト唱フル者、是ナリ」とあるが、まだこの時期には一般的な用例とはなっていない。この時期、plain の訳語として定着していたのは「平原」であり、例えば内村(1894)は「地理学考」(のち地人論と改題)のなかで世界の国々を、山国、平原国、海国、の三つの類型に分けている。

「平野」についての明確な定義は明治16年(1883)の若林虎三郎編「地理小学」巻之一に挙げられている。すなわち「陸面 陸ノ面ハ平直ニアラズシテ多少起伏セリ其ノ高キ部分ヲ高地ト云ヒ低キ部分ヲ低地ト云フ」「谿谷 高地ノ間ニ在ル細キ低地ヲ谿谷ト云フ」「平野 平衍ニシテ廣漠ナル低地ヲ平野ト云フ」とあり、さらに低地の項に「八州ノ平野、石狩ノ平野、尾濃ノ平野、陸前ノ低地ハ最モ廣潤ニシテ延袤ニ互レリ」と複数の平野名を示している。

ついで明治26年(1893)の學海指針社編「日本地理初歩」巻之上には、(本州の意の本島では)「平野ノ廣キモノハ、關東ノ平野ヲ最トシ、之ニ次グモノヲ、美濃・尾張及陸前ノ平野トス」とこれをほぼ踏襲している。

これに対して、盆地という用語が初等教育段階で用いられるのは遙かに遅れ、いわゆる第二期国定教科書といわれる明治43年(1910)文部省発行の尋常小学校地理巻一にも、(福島県の)「西

部は阿賀川の流域にして、沿岸に漆器をもって有名な若松あり。」「京都府は京都平野の地方より西北の山地に亙る。」「奈良県は奈良平野より南方の山地に及ぶ。」などとあり、流域もしくは平野の語が用いられていて、盆地という用語はまだ見当たらない。

ようやく第三期国定教科書から用語「盆地」が用いられる。すなわち大正7年(1918)文部省発行の尋常小学地理書巻一には「阿賀野川上流の流域に會津盆地あり。若松はこの盆地の中心にして、漆器を産す。」「京都は京都盆地の北部に位し…」「奈良は奈良盆地の中心都市をなし…」などとある。

これらの記述は、きわめて興味深い。なぜならば「盆地」の初登場の時から、盆地地形という自然地域としてではなく、既に中心都市との関連で、人文地域として盆地が扱われていたことである。それは後に「盆地」の名を「平地にあつては、その中心都市の名をとる。」というように、人文的な名称をとることと繋がるからである。

#### 4. 北上の低地に関する呼称の変遷

では現在「北上盆地」あるいは「北上平野」と呼ばれる地域については、どのように呼称が推移したであろうか。前節に述べたように、陸前の平野という呼称は既に用いられていたが、北上川の下流部などを指していたと思われ、現在の岩手県内陸部の低地に対する自然地域名としては、「奥ノ平野」という呼称が(より広い地域を指しているが)おそらく最も早いものの一つであろう。

金港堂が明治27年(1894)1月3日(明治27年1月16日文部省検定済)に発行した「小学校用日本地理」には、「奥羽ノ平野ハ大抵、河流ニ沿ヘル處ニアリ、奥ノ平野トハ北上川、阿武隈川ノ流域ニシテ、羽前ニ山形、米澤ノ平野アリ、會津平ハ岩代ニアリ」

一方、同じく金港堂から同時に刊行された「小学校用日本地理補習」(藤原佐一郎氏蔵書)には、「本土ニ於テハ奥羽ニ奥ノ平野、及ビ山形、米澤ノ平野、會津平アリ。奥ノ平野トハ、北上、阿武隈両河谷ノ総稱ニシテ、地味、概、肥沃、米穀、桑ニ適セリ。」とある。

この二つの教科書の関係は、前者は高等小学校第一・二学年用、後者は同じく第四学年用である。(第三学年用は外国地理。)すなわち、後者は前者の復習用に作られている。しかし内容的には前者が各畿・道別の地誌が主体であるのに対し、後者はいわゆる系統地理で、自然、産業、生活の多くの項目ごとに日本の各地の様子が記されている。したがって前者の記述は東山道の項に、後者は平野及び河・湖の項に含まれている。

明治新政府の東北における二大開発事業、すなわち野蒜築港と安積疎水がともにこの「奥ノ平野」に位置していることは興味深い。北上川、阿武隈川という二つの大河の流域が、仙台湾岸の平野と運河によって結ばれた広大な「奥ノ平野」とみなされ、明治新政府の国土開発の対象として大きな期待がかけられていたのであろう。

その後の各教科書には、この地域の地形に関する具体的な記述はほとんど無く、ようやく前記の第二期国定教科書に至って、(奥羽山脈の)「東方に並びて南に阿武隈山脈、北に北上山脈の互れるあり。奥羽山脈との間に細長き平野を挟み、阿武隈・北上の二川其の中を流る。」とある。

盆地の呼称が現れる第三期国定教科書でも、東北では會津盆地以外は盆地の名は無く、北上は「主なる河川の沿岸の平野」という中に含まれている。また第四期国定教科書(1935)や第五期

国定教科書(1938)では「奥羽地方には南北に長い山脈が三列になってゐる。これらの山脈の間には東に長い平地をはさみ、西にいくつもの盆地をはさんでゐる。」

以上、尋常小学校や高等小学校の地理教育におけるものを対象に考察してきた。中等教育においても、ほぼ同様であつたらしいが、詳細の検討は後日を期し、ここでは第二次大戦前の中等教育において用いられた地図帳のうち、最も多く用いられ、内容的にも優れていた三省堂刊行の地図帳についての分析を行つてみる。

この地図帳(三省堂編輯所 1937)のなかの平野と盆地および類似の地形を挙げると次のようになる。

釧路平野、十勝平野、石狩平野、津軽平野、能代平野、秋田平野、北上平野、庄内平野、仙台平野、阿武隈平野、越後平野、関東平野、富山平野、濃尾平野、伊勢平野、大阪平野、播磨平野、筑波平野、熊本平野、以上19平野。

上川盆地、雄物川盆地、新庄盆地、山形盆地、米澤盆地、会津盆地、秩父盆地、甲府盆地、伊賀盆地、近江盆地、奈良盆地、三次盆地、日田盆地、人吉盆地、以上14盆地。

ほかに善光寺平、佐久平、松本平、諏訪平、伊那谷、木曾谷。以上平及び谷6。

この戦前の地理教育の到達した高い水準を示す地図帳の用語を、現行のものと比較すると、北上、阿武隈の両者が平野になっていること、横手盆地が雄物川盆地になっていること、信州の伝統的地域呼称の平と谷が用いられていること、などが目につく。川や谷の語がついたり、川の固有名詞が用いられたりして、現行の地域名に比し河川がより重視されていたことがわかる。

第二次大戦前における最も優れた外国の日本地誌研究者の一人である Trewartha (1934) は、Kitakami Lowland とし、いわゆる北上盆地に仙台平野を合わせたものとしている。(第2図) この地域区分は、日本地誌学の権威であつた田中(1927)を参考にしてはいるが、かなりの相違もあり、特に北上「平野」付近については大きく異なる。田中(1927)は、「奥羽東部低地(東部縦谷平野)」の名称のもとに、陸奥東部平野、北上河谷平野、陸前平野、阿武隈河谷平野をまとめている。(第3図)

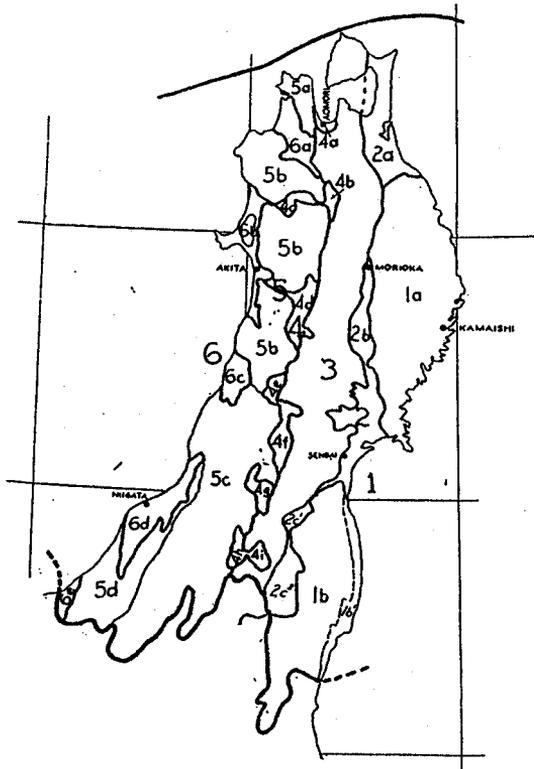
このように、第二次大戦以前においては、北上「盆地」と現在呼ばれている地域は、おおむね平野と呼ばれ、かつ現在仙台平野と呼ばれている地域などとの連続性が重視されている。

しかるに、前述のように1950年代半ばに、地理調査所の名称と文部省の名称とがともに北上「盆地」と定めたため、その後の教科書・学校地図帳は全部が「北上盆地」に統一される。また社会科の副読本的な書においても、ほとんど全てが「北上盆地」である。(例えば1981年発行の「岩手の地理ものがたり」、1983年の「わたしたちの郷土 岩手県」、同じく「ほくらの岩手県」)

角川地名大辞典3巻(1985)には、北上盆地と北上平野の二つの項があるが、北上平野の項には北上盆地をみよという指示があるのみで、北上盆地の項の説明の中には、この「盆地」がわが国最大級の盆地の一つであるという記述もある。したがって、「北上平野」も使用されていることを示してはいるが、「北上盆地」の方がより適切であるかといれる記述になっている。

また、新版岩手百科事典(1988)には「北上盆地」の項はあるが「北上平野」の項はない。日本歴史地名体系3(1990)には「北上盆地」の語のみがある。

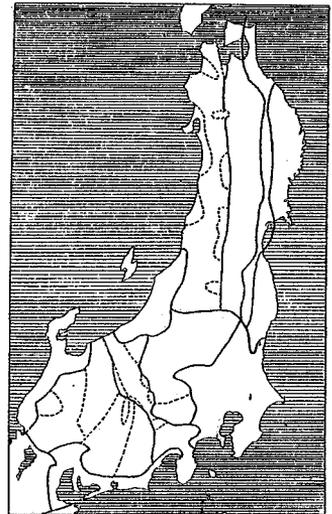
しかし、この地理調査所～文部省の名称が、第二次大戦前の地理学や地理教育の場で長年用いられていた区分や名称を変えるほどの、新しい学術的知見や、より学術的に評価できる論理によって定められた、とは言い難く、単純な分類基準による拙速な決定という謗りを免れることはできないと思われる。



- Region 1. Eastern Highlands
  - 1a. Kitakami Hill and Mountain Land
  - 1b. Abukuma Hill Land
    - 1b<sup>1</sup>. Coastal Belt
- Region 2. Eastern Lowlands
  - 2a. Mutsu (Sambongi) Diluvial Plain
  - 2b. Kitakami Lowland
  - 2c. Abukuma Lowland
    - 2c<sup>1</sup>. Fukushima Basin
    - 2c<sup>2</sup>. Koriyama Basin
  - 2d. Yokote Basin
- Region 3. Central Mountain Range
- Region 4. Western Intermontane Basins
  - 4a. Aomori Plain
  - 4b. Hanawa Basin
  - 4c. Odate Basin
  - 4d. Yokote Basin
- Region 5. Western Range of Mountains and Hill Country
  - 5a. Tsugaru Horst
  - 5b. Dewa Hills
  - 5c. Asaki-Iitoyo Mountains
  - 5d. Echigo Hills and Associated Grabens
- Region 6. Western Plains of Ou
  - 6a. Tsugaru Basin
  - 6b. Noshiro-Omono Plain
  - 6c. Shonai or Mogami Plain
  - 6d. Echigo or Niigata Plain

第2図 Trewartha (1934) の地域区分図

(地名表記には誤りもあるが  
原文のまま転記した。)

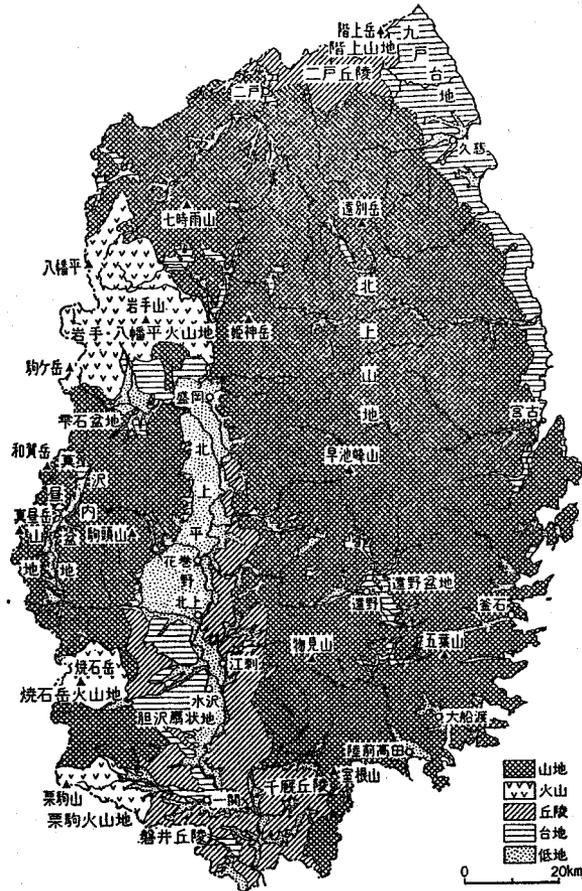


第3図 田中(1927)の地域区分図

東北地方の太平洋側に一連の平野を設定し日本海側に多くの盆地、平野を区分している点に注目されたい。

なぜならば地形分類などをてがけた専門の研究者は、この名称の設定後も必ずしもこの名称を用いているわけではないからである。たとえば渡辺光(1961)は北上阿武隈低地帯として一括し、さらにその中を北上低地開析山麓面、北上低地扇状地開析扇状地、(ほかに仙北仙台平野、福島盆地、阿武隈低地開析山麓面、郡山盆地)と区分している。複数の研究者の地形分類をもとにまとめた経済企画庁(1968)の50万分の一地形分類図も、北上川平野とし、その中を盛岡平野と石巻平野とに区分している。

西村・中村(1975)は(北上川の)「狐禅寺狭窄部より上流域を一つの大きな盆地とみることができるため、北上河谷のこの部分を北上盆地と呼ぶことがある。(中略)盆地というには形態上やや不自然とみる場合もあって、北上(川)平野の呼称もある。」としている。また中村(1975)は「北上河谷」および「北上平野」を用いている。(第4図)



第4図 岩手県の地形区分図

(経済企画庁「土地分類図 1968」により中村嘉男・日本地誌研究所作成) 二宮書店刊 日本地誌3 (1975) 所収

一方、民間では今なお「北上平野」が用いられていることがり、(例えば岩手年鑑は1961年版以降、最新刊の1992年版に至るまで「北上平野」と記している。)、副読本でも社会科以外のものには中央平野(子ども日本風土記《岩手》1974)などと書かれたりする。

## 5. 形態としての「盆」状とは何か

漢字「盆」の語義のうち容器に関しては、二つの意味がある。諸橋轍次(1958)の漢和辞典巻八には

原意 はち、ほとぎ、瓦器の名。

邦 茶器、食器などを乗せる縁の浅い台とある。

大槻文彦(1889)の私版言海の盆の項には、

(一)ヒラカ。瓦器ノ平形ノモノ。鉢

(二)今、専ラ、木製、方圓ノ扁平ナル器、縁浅シ、物ヲ載スル用トス。承盤。

と説明されている。

すなわち、本来の「盆」は主に液体を入れる容器であり、内側が窪んでいる形状のものである。<sup>4)</sup>

ところが日本ではこの本来の意のほか、固体を載せる浅い縁のある平らな盤状のものをも「盆」と呼ぶようになってしまったのであった。

英語の basin<sup>5)</sup>、ドイツ語の Becken、フランス語の bassin に当たる訳語としての盆地の盆は、この本来の「盆」の意味であった。しかし現代の日本では「盆」は英語の tray に当たる物を連想し、本来の窪みをもつものとしてではなく、縁のある平らなものとしてイメージされ、そこから日本独特の「盆地」の定義が生まれてしまったのである。

## 6. 地理用語としての basin と盆地

明治のはじめに、自然地理用語の basin がどう訳されていたかは、1876年刊行の百科全書「地文学」により窺い知ることができた。同書のなかの「ミスシッピー河匯、セントロウレンス河匯、オリノコ河匯、アマゾン河匯」、などの河匯(かかい、川の水の集まるところ)にはベースンとルビがふってある。

1936年の地理学小辞典(古今書院)には basin に対する訳語として、窪地、盆地、海盆の三つを挙げている。

現在の学術用語の基準としては文部省の学術用語集がある。その地理学編(文部省1981)には、盆地の英訳は basin とあり、basin の和訳は(1)盆地(2)海盆、とある。しかし海外の文献においては、日本のような盆地の感覚で用いられていることはほとんど無く、「海盆」、「流域」、「盆状地質構造」などを指す用語となっている。

Schaefer(1959)は、「山地そのものは山地群、山地、谷、盆地 Becken、高原面に分ける場合が多い」と記しており、盆地は山地の一部として位置づけられている。

Murphy(1968)は、世界の地形を次の6つの類型にまとめた。

Plains

High tablelands

Hills and low tablelands

Mountains

Widely spaced mountains

Depressions

この最後の Depressions の説明には次のように書いてある。

Basins surrounded by mountains, hills, or tablelands which abruptly delimit the basins.

すなわち、「basin のうち、山地、丘陵、台地、などに囲まれ、それらが basin の輪郭をくっきりと画定しているもの」を、Depressions と呼んでいる。この Depressions を西村 (1969) は盆地と訳しているが、たしかにこの定義の Depressions が日本でいう盆地に近いのである。

周りの山地とは画然と境された低平地を盆地と呼ぶ日本の定義は、かなり以前からも一部にはあった。例えば前記1936年の地理学小辞典の盆地の項には、

低平地の周囲が多少急傾斜をもつ高地で取囲まれている地形を云ひ、(中略)盆地の低平部(盆地床或は盆地底)と周囲の山地との境を盆地縁と云ふ。(後略)

とあり、この見方がのちの地理調査所～文部省の定義に引き継がれている。

また、最近の地形学界においても、漸次、地理調査所～文部省の定義が定着しつつあり、例えば地形学辞典では白井 (1981) が盆地の定義を「周囲を高地で囲まれた低く平坦な土地」とほぼ類似した記述をしている。

しかし、basinは窪んだ形全体を指すので、本来は周縁の山地や丘陵などの斜面も含めた用語である。それに対して地理調査所～文部省定義は、いわゆる盆地床 basin floor のみを盆地としてしまっている。これは地理調査所～文部省定義が、従来の広義の平野から盆地床を抜出して「盆地」とし、「平野」と対置させたために生じたのである。

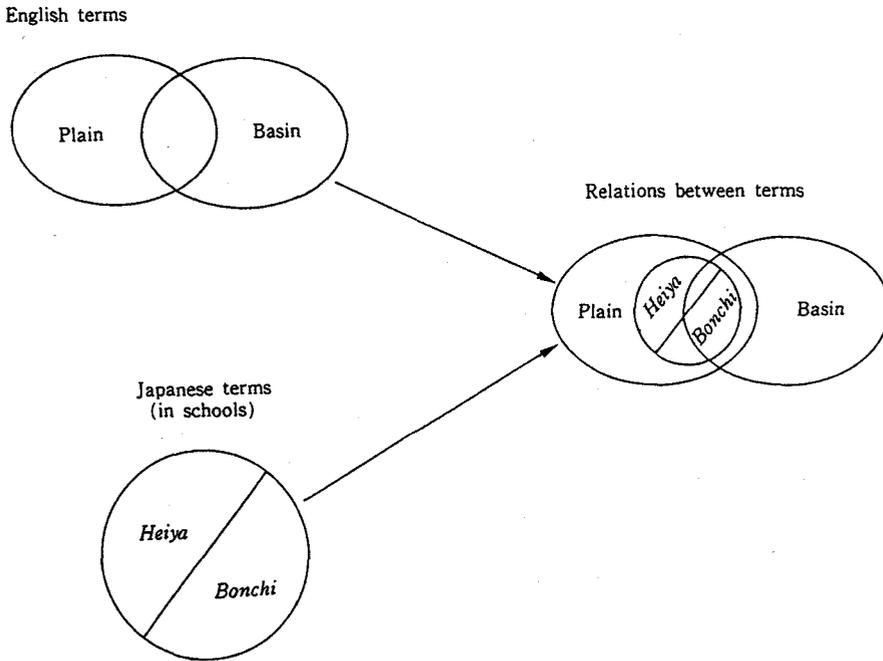
すなわち個々の盆地については、この地理調査所～文部省定義により、盆地の規模の矮小化が行われ、盆地を平地と並べることにより、平野の数や範囲の矮小化が行われたのである。これによって日本のモザイク的地形の表現には便利になった点はあるが、グローバルな視野でみると、国際性のない定義を定めたことになる。英語の plain や basin と日本の地理教育において用いられている「平野」や「盆地」との関係をベン図で示すと第5図のように示される。(Yonechi 1985)

また「平野」「盆地」の区分を、単にそれを取り巻く周縁部が、海も含むか否かによって行うため、平地そのものの形にかかわりなくなっており、そのため北上「盆地」のような、南北に120kmと長く、東西の幅は最大20km程度、という平地の形態は盆状<sup>6)</sup>というようには、あまりにも狭長であって、北上河谷か北上谷平野と呼ぶ方が適切である。

さらに一つ重要なポイントとして、この日本的「盆地」(と日本的「平野」)の固有名詞の部分の名付け方の問題が指摘できる。盆地や平野の固有名詞部分は原則として中心都市の名をつけるという決め方は、盆地や平野が人文的な地域単位として認識されていることを意味する。コンゴ盆地、アマゾン盆地などに類する河川名を冠する盆地は、厳密には北上盆地のみ<sup>7)</sup>であり、その点でも北上盆地は例外的で、むしろ北上河谷か北上谷平野などの方がむしろ妥当という見方ができよう。

## 7. おわりに

「北上盆地」か「北上平野」かという問いは、一自然地域の名称の問題に関する小さな問いか



第5図 basin, plain と盆地・平野との関係 (Yonechi 1985)

けのようにみえる。しかし、この一見些細な自然地域名称の問題は地理教育における多くの大きな問題と関わっている。その一つは日本の地理、この場合は地形を、世界的視野の中で、言い換えれば国際的感覚の中で、その一般的、共通的な性格をとらえようとするか、日本の個別性、特殊性をとらえようとするかという問題である。世界的な視野のなかでの自然地域名称とは言い難い日本独自の基準による自然地域名称を日本に対しては用いて、他の世界については国際的な用例をほぼそのまま用い、結局は、世界の平野と日本の平野とは性格が異なる、世界の盆地と日本の盆地とは性格が異なる、と教えることは、(たとえ、この説明がスケールの相違の問題など妥当な部分を含んでいるとしても) 根本的に再検討すべき問題であろう。このような説明は、日本と他の造山帯の地域との共通性を見失わせ、日本を「例外」として誤認させる恐れがある。《日本と同じく造山帯に位置し、類似の地形構造を呈するニュージーランドを研究した Cotton (1958) は日本の多くの盆地と似たタイプの盆地の盆地床に当たるもの (すなわち地理調査所～文部省定義の盆地に近いもの) を basin plain としている、この用語なども日本において参考とすべきであろう。これにならえば「盆地平野」という呼称にならうか。》

逆に日本の基準による自然地域の把握を、単純に海外にも当てはめれば、世界の他の地域の地形の正しい理解を妨げることになる。日本の地形を海外に紹介する場合も、例えば今用いている北上盆地を、直ちに Kitakami Basin と訳すのは実態を表現しにくい。むしろ Kitakami Valley あるいは Kitakami Valley Plain の方が適切であろう。

しかしながら、この地理調査所～文部省の名称が設定されてから既に三十年以上が経過して、例えばこの定義の「盆地」を日本の特色として、幾つかの論考が生まれている。米山 (1989など) が、盆地宇宙と平野宇宙と対置させ、樋口 (1981) は日本の景観の類型のひとつとして第一に盆

地の景観をあげている。地理学者の中でも、例えば中山(1991)が「盆地こそ、弧状列島人間生活の特色を浮き出させるもの」と述べて、日本の「盆地」が地理教育上、きわめて重要な対象であることを指摘している。これらはいずれも優れた着想や重要な示唆を含む論考であるが、地理調査所～文部省の名称の日本独特の定義に依拠した議論であることも事実であり、文化論などの領域にまでキーワードとして使われるほどに定着してしまった以上、簡単には定義を変更できないという状況下にある。

次に地理教育における画一性、唯一の正解を求めようとする傾向などの問題がある。しばしば「児童生徒に無用な混乱を与えないように…どれが本当は正しいのかを明示して欲しい」という現場の教師からの声がある。だがこのような要求は、むしろ教師自身が安易な「唯一の正解」という拠りどころが欲しいと願っていることにほかならない。むしろ多様性や多義性をもつ地表の諸事象こそが現実の地理学の対象であり、○×問題の作りやすいような安直な類別を、地理教育に持ち込むことは大きな誤りである。

地名について、これまではあまりに性急に「正しい、唯一の地名」を教えようとしすぎたのである。こどもが混乱するという理由で、権威ある？機関などの審議結果に安易に頼るのは問題が多い。複数の正解、多様な解釈のあることを、もっと積極的に地理教育に取り入れてゆくべきではあるまいか。

さしあたり、北上盆地か、北上平野かという問題については、どちらの呼び方も間違っていないが、自然的には北上河谷あるいは北上谷平野、ないしは、北上平野と呼ぶのがより妥当であり、人文的には、中心都市をもち海港をもたない内陸の低平な圏域を盆地と呼ぶとすれば、北上盆地とも呼び得る、というあたりが、結論となろう。

謝辞 この研究にあたり、多くの方々からご協力をいただいた。特に仙台金港堂会長・藤原佐一郎氏からは貴重な資料をご貸与いただいた。記して謝意を表する。

この拙い報文を筆者がはじめて北上平野について教えていただいた恩師(当時山目国民学校訓導)及川敏一先生にささげます。

#### 注

- 1) 文部省の自然地域名で、地理調査所のそれと異なった主な点は、北上高地や阿武隈高地などを、それぞれ北上山地、阿武隈山地と呼んだことである。これは近年、地理調査所の設定どおりの「高地」に代えられた。このことも含め、高原、高地、山地の問題については、次報で取り上げる予定である。
- 2) 例示にはのちの版には多少の異同があり、関東平野に代えて鳥取平野が挙げられ、盆地は山形、津山、人吉の各盆地に置き換えられた。特に盆地の分は、かつて北上平野、伊那谷など盆地以外の地形名称のついていたものの例示から、より定義に相応しいものの例示に代えたものであろう。後章で論じたように、北上「盆地」や伊那「盆地」は、少なくとも典型的な盆地とは言い難いのである。
- 3) 現行の地図帳(例えば高等地図帳・二宮書店)には、「木曾谷」のみは残っている場合がある。木曾谷は前記の各書で盆地とは定義していないため、自由に谷の名がつけ得るのである。
- 4) 「覆水不返盆(覆水盆に返らず)」という時の盆で、もともと水を入れる器でなければこの

言い回しは成り立たない。

- 5) a basin of water (水ばち一杯分の水) とか, basinful (水ばち一杯分) などの言い回しからも, basin が液体を入れる容器であることがわかる。
- 6) 「丸い, 丸い, まん丸い盆のような月が…」という童謡のように, 盆状というのは, 平面形としては円形をなす。
- 7) もちろん北上市は「盆地」の中心都市ではないし, 北上市という名よりも北上「盆地」の方が古い。この地理調査所～文部省定義の「平野」にも純粋に河川名のみによるものではなく, 北海道の石狩平野と十勝平野が河川名と他の地域名の重合したものとといえる程度である。

## 引用文献

- 有井琢磨 (1985): 「義務教育における地形用語の研究」新地理, 33-2, 3-10
- Cotton, C.A. (1958): *Geomorphology*. 505. (Whitcombe & Tombs Ltd. Christchurch)
- 樋口忠彦 (1981): 『日本の景観 ふるさとの原型』 269. 春秋社
- 平凡社地方資料センター編 (1990): 『岩手県の地名 (日本歴史地名体系 3)』 804. 平凡社
- 岩手放送 (1988): 『新版岩手百科事典』 931. 盛岡
- 岩手県地理学会編 (1983): 『わたしたちの郷土 岩手』 191. 光文書院
- 岩手日報社 (1991): 『岩手年鑑1992年版』 847. 同社
- 岩手の地理ものがたり刊行委員会 (1983): 『岩手の地理ものがたり』 207. 日本標準
- 経済企画庁 (1968): 50万分の一地形分類図, II 東北
- 金港堂 (1894): 『小学校用日本地理補習』 49 (丁). 金港堂
- 教科書研究センター編 (1978): 『地名表記の手引』 276. ぎょうせい
- 建設省国土地理院 (1981): 『標準地名集 (自然地名) 増補改定版』 247. 同院
- 古今書院編集部 (1936): 『地理学小辞典』 379. 古今書院
- 松尾俊郎編 (1959): 『地名の研究—社会科教授資料—』 210. 大阪教育図書. 大阪
- 文部省 (1959): 『地名の呼び方と書き方《社会科手びき書》』 157. 大阪教育図書. 大阪
- 文部省 (1981): 『学術用語集 地理学編』 120. 日本学術振興会
- Murphy, R.E. (1968): "Map Supplement No.9, Landforms of the World". *Ann. Assoc. Amer. Geogr.* 58. 198-200.
- 中山正民 (1991): 「日本の盆地—弧状列島の人間の生活の場として—」学図・教材研究・中学校編・社会, 126, 1-5
- 名瀬川益男 (1983): 『ぼくらの岩手県』 198. ポプラ社
- 日本作文の会編 (1974): 『子ども日本風土記《岩手》』 150. 岩崎書店
- 諸橋轍次 (1958): 『漢和辞典, 巻 8』 1218. 大修館書店
- 二宮書店編集部 (1991): 『高等地図帳 四訂版』 144. 二宮書店
- 中村嘉男 (1975): 「岩手県総説・自然 (地形)」日本地誌 3, 345-3509. 二宮書店.
- 西村嘉助 (1969): 「大陸の地形」西村編, 自然地理学 II, 193-201. 朝倉書店
- 西村嘉助・中村嘉男 (1975): 「東北地方総論・自然 (地形)」日本地誌 3, 15-35. 二宮書店.
- 大槻文彦 (1889) 『私版日本辞書言海』 (大修館書店 1979の復刻版による.)
- 三省堂編輯所 (1937): 『新制最近日本地図』 88. 三省堂

- シェーファー, I. (水山・守田訳) : 『地形小論』《Gustav Fochler-Haukeら(1959) : Allgemeine Geographie. (Fischer Bucherei) .より Schaefer, I. 執筆分の訳出》 地人書房, 京都
- 柴田承桂訳 (1876) : 『百科全書・地文学』 119, 文部省
- 師範学校編 (1874) : 『地理初歩』 文部省, 12 (丁)
- 白井哲之 (1981) : 「盆地」 地形学辞典, 587, 二宮書店
- 白石大二編 (1960) : 『当用漢字・現代かなづかい・送りがなのつけ方』 284, 大蔵省印刷局
- 楳村大彬 (1985) : 『自然地理用語からみた世界の地理名称 上巻』 440, 古今書院
- 楳村大彬 (1986) : 『自然地理用語からみた世界の地理名称 下巻』 462, 古今書院
- 竹内理三ほか編 (1985) : 『角川日本地名大辞典 第3巻 岩手県』 1982, 角川書店
- 田中啓爾 (1927) : 「日本の地理区」 地理学評論, 3, 1-21
- Trewartha, G.T (1934) : “A Reconnaissance Geography of Japan”. Univ. of Wisconsin Studies in Soc. Sci & Hist. 22.9-283.
- 内田正雄編 (1870) : 『輿地誌略, 卷一』 72 (丁), 大学南校
- 内村鑑三 (1894) : 『地理学考 (のち地人論と改題)』 229, 警醒社書店
- 渡辺 光 (1961) : 『地形学』 古今書院, 383
- 山口恵一郎 (1955) : 「日本主要自然地域の名称の設定」 地学雑誌, 64, 11-18
- 米地文夫 (1977) : 「盆地にも眼を向けよう」 地域開発, 77-4, 69
- 米地文夫 (1980) : 「定住の場としての盆地について」 地域経済研究会年報, 16, 12-17
- 米地文夫 (1984) : 「地形学的単位としての高原および盆地について—アナトリア・モンゴル両高原を例として—」 地理予, 25, 30-31
- Yonechi, F. (1985) : “Relationships between Landscapes and Inter-Landform Structures”. Sci. Repts. Tohoku Univ. 7th Ser. (Geogr.) 35, 86-94
- 米地文夫 (1989) : 「水を集めるところ—定住の場としての盆地・流域—」 地域経済研究会年報, 21, 1-9
- 米山俊直 (1989) : 『小盆地宇宙と日本文化』 276, 岩波書店

なお次の教科書の原典は筆者未見であるが、『日本教科書体系近代編 第15~17巻地理(一~三)』講談社(1965~1966)収録のものを検討した。

- 學海指針社編 (1893) : 『日本地理初歩 卷之上』
- 金港堂 (1894) : 『小学校用日本地理』
- 文部省 (1918) : 『尋常小学地理書 卷一』
- 文部省 (1910) : 『尋常小学地理 卷一』
- 大槻修二編 (1877) : 『日本地誌要略 卷之二』 青山紅樹書樓
- 若林虎三郎編 (1883) : 『地理小学 卷之一』 琴山樓

これらのほか, 多くの教科書, 地図帳, 辞典類, 日本~岩手県の地域区分関係論文などを参照したが, 煩瑣に過ぎるため, 本文中に引用したもののみを挙げ, 他は省略した。